

巻 頭 言

2023 年 ICIAM 大会副委員長・学習院大学理学部

岡本 久

2017 年 5 月、ICIAM（イシアムと読みます）の委員会で、2023 年の応用数理の国際会議である ICIAM を日本数学会と日本応用数理学会の共催で開催することが決定されました。ここに、ICIAM について簡単にご説明申し上げます。

ICIAM は International Congress on Industrial and Applied Mathematics の頭文字で、International Congress of Mathematicians の応用数学版という性格を持っています。2023 年で 10 回目ですから、ICM の歴史にはとてもかかないませんが、毎回コンスタントに 3000 人以上の参加者があり、数学の応用をキーワードに様々な分野の研究者が一堂に会し、活発な議論のみられる会議であります。

日本応用数理学会はこの国際会議招致をすべく、10 年前から活動してきました。ICIAM は欧米の独壇場でしたが、2009 年にはアジア初開催をかけて立候補し、そのときには北京に 13 票対 11 票で敗れました。理由はいろいろあったと思いますが、情報戦で劣ったという感じはしています。そのときは日本応用数学会主催・日本数学会後援であったように思います。その後、臥薪嘗胆のあと、日本数学会と日本応用数理学会共催という形で再立候補し、今回の招致を勝ち取りました。

2023 年の ICIAM に立候補したのはインド・日本・韓国の 3 国でした。その中で日本の提案が選ばれたのは、関係者の皆様のご努力のおかげであります。会場を無償で提供していただいた早稲田大学の皆様や、財政的な援助を約束してくださった東京観光財団の方々のご尽力、日本国政府のお力添えをいただけるよう働きかけてくださった多くの人々に改めてお礼申し上げます。ICIAM 招致活動を通じて、政府内の様々なレベルの人々とお話をするのができて、数学を振興させるのはよいことだという認識が深まったのではないかと期待しております。韓国が対抗馬であったわけですが、ICM2014 を成功させたこともあり、また、韓国政府の財政的支援もあって、日本側は楽な招致活動ではありませんでした。ですが、日本の数学の長年にわたる業績の積み上げ（固有名詞は挙げませんが、ジャパンオリジナルの数学理論・アイデアは上記委員会で宣伝してきました）および伝統と、これまでの様々な学会活動が認められたのだと思います。

ICIAM は応用数学だから私には関係ないと思われる数学会会員の方もいらっしゃるかもしれませんが、応用の意味は極めて広く、過去の ICIAM を見る限り多くの数学会会員の皆様に興味を持っていただける会議であると思います。たとえば、フィールズ賞を受賞した C. フェアーマンさんなどがシドニーにおける ICIAM で講演されています。

ICIAM と ICM では、以下の点が異なります。ICM では個人の一般講演と招待講演からなりますが、ICIAM で最も講演の多いのはミニシンポジウムであります。ミニシンポジウムは誰でも応募できますので、純粋数学の研究者が応用数学の研究者や実験をしている人たちと一緒に提案することも可能ですし、実際そういうミニシンポジウムは数多くあります。ですから、純粋数学の人々の成果の発表にもなる国際会議です。たとえば数論と暗号とか、最適化の問題とか、可積分系の応用とか、偏微分方程式とか、日本人の得意とする分野で、ICIAM で発表ができるものはいくらかもあります。「私にはすぐには応用が見えないけれども、今聞いてくださっている皆さんの中には、私のこの結果を応用する方法を見つけてくれる研究者がいらっしゃるのではないのでしょうか？」といった講演も可能なわけです。

2019 年の ICIAM はスペイン王国バレンシア市で開催されます。バレンシアは中世の町並みの一部が残っている美しい町で、地中海に面していることもあって、シーフードの美味しいところでした。東京あるいは大阪から中継地を 1 カ所設けるだけで到達できます。パエリア発祥の地であるというふうにも聞きました。また、世界的に有名なオペラハウスもあり、リラックスして数学の議論を戦わすのに適した場所であると思います。2023 年の前に 2019 年の ICIAM にぜひとも数学会会員の皆様も参加をご検討いただければ幸いです。